

全中社研会報

全中社研滋賀大会を振り返って

大会主題「社会を創る力を育てる社会科学習」を育める・つなげる・つくる」のもと、第四十七回全国中学校社会科教育研究大会を、平成二十六年十一月六日・七日に、大津市・彦根市・守山市で開催した。全国各地から、約七百五十名の方々に参加いただいた。

【第一日目・全体会】

会場：大津市民会館
 ●開会式
 石上和宏全中社研会長、高田満彦滋賀大会実行委員長の挨拶に続き、中尾敏朗文部科学省初等中等教育局視学官、河原恵滋賀県教育委員会教育長からご祝辞をいただいた。

●基調提案

井上陽平研究部長から基調提案として、研究のあゆみや概要、各分野における重点等を説明した。

●記念講演

写真家・今森光彦氏より「里山という身近な自然」と題したご講演をいただいた。

●表彰

全中社研ならびに近中社

た。講演では、「国際的な学力調査の結果」、「中・高生の社会参画に向けた実践力の育成」や「思考力・判断力・表現力等を育む言語活動の充実」について解説いただき、今後の社会科教育についてご示唆いただいた。

冬季セミナーに参加して東京都足立区立花畑北中学校 関 眞規子

全中社研・関プロ中社研共催の冬季セミナーは、平成26年12月26日(金)に、東京都文京区立茗荷台中学校で行われた。講師のNHK解説委員室解説委員である西川龍一氏から「教育改革が社会科教育に及ぼすこと」と題されたご講演をいただいた。

解説委員とは、政治・経済・社会・科学文化・国際の各部の記者や番組のディレクター、アナウンサーとして一線で活躍しながら、日々それぞれの担当分野の情報収集や研究を重ねて専門性を磨いている、それぞれの分野で専門性を培ってきたスペシャリストである。解説委員の役割は、時々刻々と世界各地で起きている出来事を、独自の視点で取り上げ的確に分析

し、番組に出演して、その意味や背景、課題を読み解き、視聴者にわかりやすく伝えることにある。今回のセミナーでは、教育分野の解説委員である西川氏からの貴重なお話を伺うことができた。

まず1点目として、高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜改革についてのお話があった。今年の12月22日に出された中教審の答申では、「大学入学希望者学力評価テスト」を、大学入学希望者に挑戦の機会を多く与えるために複数回実施する、各大学の個別選抜における多様な評価方法の導入を促進することが示されている。「知識・技能」を単独で評価するのではなく、「思考力・判断力・表現力」を中心に評価するので、解答方式については、多肢選択方式だけではなく、記述式を導入すること。さらに、全ての高校生について、高等学校段階の基礎学力を評価する学力評価テスト「高等学校基礎学力テスト」を新たに導入することが答申されている。こちらは、主として学力の基礎となる「知識・技能」を評価するも

のであるが、「思考力・判断力・表現力」を重視する大学入学者選抜方法への変更により、主体的・多角的な学びや協力し合って学ぶことが大事となってくると思われ、このような学習を中学生の段階でも取り入れていくことが必要になることを感じた。

2点目に新学習指導要領についてのお話があった。11月に文科省に出された諮問で答申の姿が先取りできる。その中で触れられていることの1つに、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習(いわゆる「アクティブ・ラーニング」)や、そのための指導の方法等を充実させていく必要がある、とされている。たとえば、日本の小・中学生の学びの中で、既得知識を活用する場面を充実させ、知識を活用する力を小・中学校でも高めていく必要がある。また、持ち運びに便利であり画像が鮮明であるタブレットを教科書代わりに活用することは反復学習にも適しており、時間の節約にもなることにも言及された。しかし、新たな学習・指導方法や、新しい学びに対応した教材やソ

フトの開発や評価手法についてどのように考えるか、課題も残されている。さらに、高校での「日本史必修化」について、過去のことをつなぐことをしなければ「日本」がない国になってしまうというお話もあった。たとえば古文書の保管など、正しい認識につながる部分を未来に向けて継続して行うことにより、歴史認識をしっかりとつとめる必要性を感じた。

今回の冬季セミナーでお話いただいたことは、これからの社会科学習の指導に大いに参考になる内容であった。

編集後記

今号は、十一月に滋賀県で開催された全国大会の報告を中心に構成しました。今年度の全国大会の研究テーマは、「わかる」「つなげる」「つくる」という三つの学習活動を連動させ、社会の変化に対応し、よりよい社会を構想し、自ら創り上げることでできる公民的資質を獲得させようとする素晴らしいものでした。年度末のご多用の中、原稿をいただきました皆様にご改めて感謝を申し上げます。

広報部次長 大瀧 訓久

全中社研滋賀大会を終えて

全国中学校社会科教育研究会会長 (東京都江戸川区立上二色中学校校長) 石上和宏

今年度の滋賀大会は十一月六・七日の二日間、滋賀県大津市を中心に彦根市、守山市の三市において開催しました。昨年度に引き続き近中社研との共催となりましたが、県内外から多くの参観者を迎え、盛会裏に終了することができました。大会運営にあたられました滋賀大会高田満彦実行委員長をはじめ、実行委員の先生方のご努力に対し、心から感謝申し上げます。

「平和で民主的な社会を構想し、自ら創り出そうとする資質・能力」として、副主題を熟考・評価、論述する総合的に「わかる」こと、協同の学びを重視して「つなげる」こと、社会参画として「つくる」こととしていました。また、分科会の会場を地理的分野は琵琶湖の環境教育の盛んな大津市、歴史的分野は彦根城のある

全中社研滋賀大会を終えて

滋賀大会実行委員長 (大津市立真野中学校校長) 高田満彦

第四十七回全国中学校社会科教育研究大会は、十一月六日・七日の両日に、大津市・彦根市・守山市において開催されました。この大会は近畿中学校社会科教育研究大会も兼ねており、滋賀県の属する近畿中学校社会科教育研究会にとつても第二十回という節目に当たり、これまでの近畿の研究を総括する意味でも重要な大会でした。

九百七十名(来賓・大会役員等を含む)もの参加者を迎えることができました。大会一日目は、多くの来賓の方々にご参列頂いた式典、基調提案に続き、記念講演では本県出身で日本を代表する写真家の今森光彦氏により、琵琶湖を取り巻く環境を美しい「里山」のスライドを通してご紹介頂きました。琵琶湖とその周辺の自然との調和を、長い間いろいろ工夫によって保ってきた先人の知恵に気づき、私たち滋賀県、そし

て日本に住む人たちが大切にしていかねばならないこととは何かということをお話し頂きました。

二日目の分科会は、地理・歴史・公民の三つの会場に分かれ、公開授業や研究発表を通して白熱した討議が展開されました。本大会が掲げる研究主題の「社会を創る力を育てる社会科学習」の「わかる」「つなげる」「つくる」についての質問も多く、全国からの参加者だけでなく本県社会科部会員にとつても、大変有意義な機会となりました。ご協力頂きました皆様方に対し紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

全国中学校社会科教育研究会
 全中社研 (略称 全中社研)
 http://www.zenchusya.com
 発行者 石上和宏
 編集者 市村扶二夫
 八王子市立第四中学校
 TEL 042-622-7227

●研究協賛
 久保田重幸分野長が分野別提案を行い、協議後、滋賀県教育委員会玉井正指導主事からご指導をいただきました。

●研究発表・講師講評
 東京都の高田孝雄教諭・入子彰子教諭が研究発表を行いました。その後、中尾敏朗文部科学省視学官よりご講評をいただきました。

●公民的分野
 会場：守山市立守山南中学校

●公開授業
 森康夫教諭が「私たちのまちづくり」(中心市街地活性化基本計画の通信簿)の授業を実施した。

●研究協賛
 宮下茂久分野長が分野別提案を行い、協議後、滋賀大学大学院米田豊教授からご指導をいただきました。

●研究発表・講師講評
 広島県の重秀雄教諭が研究発表を行った。その後、樋口雅夫文部科学省教科調査官よりご講評をいただきました。

●公開授業
 大阪大会実行委員会 事務局 上田真也 (滋賀大学教育学部 附属中学校教諭)

●研究協賛
 渡邊圭祐分野長が分野別提案を行い、協議後、兵庫教育大学大学院米田豊教授からご指導をいただきました。

●研究発表・講師講評
 岐阜県の今西祥幾教諭が研究発表を行った。その後、演野清文部科学省教科調査官よりご講評をいただきました。

●歴史的分野
 会場：彦根市立東中学校

●公開授業
 門野智哉教諭が「開国について考えよう」(大老・井伊直弼の決断に迫る)の授

業を実施した。

●研究協賛
 久保田重幸分野長が分野別提案を行い、協議後、滋賀県教育委員会玉井正指導主事からご指導をいただきました。

●研究発表・講師講評
 東京都の高田孝雄教諭・入子彰子教諭が研究発表を行いました。その後、中尾敏朗文部科学省視学官よりご講評をいただきました。

●公民的分野
 会場：守山市立守山南中学校

●公開授業
 森康夫教諭が「私たちのまちづくり」(中心市街地活性化基本計画の通信簿)の授業を実施した。

●研究協賛
 宮下茂久分野長が分野別提案を行い、協議後、滋賀大学大学院米田豊教授からご指導をいただきました。

●研究発表・講師講評
 広島県の重秀雄教諭が研究発表を行った。その後、樋口雅夫文部科学省教科調査官よりご講評をいただきました。

記念講演

写真家 今森光彦

「里山という身近な自然」

【講演要旨】

琵琶湖 昭和29年（1954年）に生まれ、滋賀県で育った。琵琶湖や里山が近くにある環境で、「最後の楽園」を体験してきた世代である。この体験が今の仕事の原動力になっている。

小学校4年生ぐらいまで周囲は自然が豊かだった。ニゴロブナが大雨で増水すると遡上して産卵する。何千と田んぼにいますので、登校前にバケツを持って捕りに行った。今では信じられない貴重な光景であった。

しかし、小学4年生の年にそのニゴロブナが上がってこなかった。ダムができたり、琵琶湖総合開発が進んで護岸工事が進んだり、南郷洗堰が整備されたりして水利が安定し、増水しなくなった。この頃から琵琶湖の環境は大きく変化した。やがてふなずしが高価なものになり、赤潮が発生するようになった。

現在、県の対策によりほとんど増水を作り、若干水もきれいになったが、まだニゴロブナが遡上するほどではない。琵琶湖では絶滅危惧種が増えているが、絶滅種が増えないうちにさらに...

なる対策が必要である。琵琶湖は他の湖と比べて固有種が多く独特で、世界遺産の条件をクリアしているほどである。貴重であり、大事にしたい。

里山 琵琶湖と山の間にあるエコーン（環境の端境）として田んぼを見たかった。そのため、写真家として里山に着目するようにになった。琵琶湖の写真は、自分の知っているかどうかわからないので、撮ることが怖く、あまり撮ろうと思わなかった。

新旭町の写真から 高島市新旭町の漁師と知り合い、テレビ局の番組制作のために家を借りて2年間住み撮影した。

漁師は船で船を漕ぐ昔ながらのスタイルである。琵琶湖では開発のために内湖がふさされてきたが、漁師はつぶさずに残したはずかな内湖で漁をしている。オカズトリ漁はモンドリというカゴを沈めて行うが、角度を調整するとたくさん魚を捕れる。また、春先のコイ漁は、ヨシ原にやっできて産卵するコイの習性を利用する。ヨシ焼きは一度やめてい

だが、見直されている。春の風物詩である。

新旭町では湧き水が多い。セキショウモという藻がたくさん生える。その水を使って地元の人々は野菜を洗う。

魚の写真は、琵琶湖から川や水路まで遡上してくるトウヨシノボリ、他の地域より琵琶湖では小さいアユ、深海部から遡上してくるピワマスなど。ピワマスは、琵琶湖の環境が悪化するト一番に絶滅すると言われている。

里山の写真から 大津市仰木にある棚田のリンドウの風景は、圃場整備で今はなくなった。トノサマガエルは農業に弱く、一時見なくなった。近年、有機農法やアイガモ農法が進み、見られるようになって安心した。田んぼの農道

各分野報告

地理的分野発表報告

●分野別提案 ●提案者

渡邊圭祐教諭 (大津市立打出中学校) 地理的分野では、研究主題である「社会を創る力」を以下の三点と捉え、その基盤を育む授業を構想する研究を進めた。①知識と技能の習得だけに留まること

には、石仏が多い。

雪のころの雑木林では、ギフチョウがカタクリの花にとまる。人が雑木林を世話をしなくなるといわなくなってしまっているので、この風景は人の心が息づいている環境であることがわかる。

琵琶湖だけを見られることが多い。しかし、周りの田んぼも琵琶湖とつながっていることを意識して琵琶湖を捉えたい。

滋賀県は環境県なので、今後に期待したい。漁師の言葉に「生きた水は魚が住んでいる」というのがあり、改めて感動を呼び起こす。

(事務局 七里広志)

よりよいものにしていくとする資質や能力(つくる)

また、「日本の諸地域」の配列を変更し、「近畿地方」と「身近な地域の調査」を融合した単元プランを提案した。

公開授業 ●題材名 「近畿地方」～「身近な地域の調査」～身近な地域における持続可能な環境を考える～

武田真和教諭 (大津市立瀬田北中学校) これまでの学習の中で習得した知識や生活経験を活用し、「地域住民・漁業協同組合」「企業」「地方自治体」の三つの立場に立ち、「セタジミが育つ環境」のための取組を班で考え、提案させた。

その後、他のグループが提案したことを取り入れて、瀬田地域の持続可能な環境を実現するために必要な取組を再考し新たに提案させた。

●研究発表

今西祥幾教諭 (岐阜市立長森中学校) 「主体的に社会の形成に参画する力を育てる社会科学習」 平成二十七年度の全国大会に向けて、実践研究の報告があった。社会に参画する力を育てるためには、単

元を貫く課題の在り方やその意義を考え、単元を構造的にとらえることや、事実に関する認識や価値に関する認識を形成する授業モデルを工夫することが有用であるということが、世界の諸地域の「アフリカ州」の実践例を通して提案された。

●指導助言

米田豊氏 (兵庫教育大学大学院教授) 「社会科学」は「社会認識形成をとおして市民の資質を育成する教科」である。市民的資質を育むには、授業の中に「合理的意志決定」ができる過程を取り入れる必要がある。その際、これまで学習で習得した知識を活用して「事実の分析的検討」を行うことがポイントとなる。また、留保条件付きの「合理的意志」についても研究を進める必要がある。

●講演講評

濱野清氏 (文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官) 「何のための『思考力、判断力、表現力』等の育成か？」と題して講演講評をいただいた。現行学習指導要領改訂の留意事項についてふられた後、「思考力、判断力、表現力」等を育成するには中学校ならではの「論理的思考力」を育む「言語活動」の充実を図る必要

があること、地理的分野では資料等の活用と作業的・体験的な学習といった地理ならではの問題解決的な学習の充実を図っていく必要があることなど、今求められている授業の在り方についてご講演いただいた。

歴史的分野発表報告

●分野別提案 ●提案者

久保田重幸教諭 (彦根市立稲枝中学校) 歴史的分野研究推進委員会では、「わかる・つながる・つくる」の3つの学習活動を設定するとともに、それらを構成した授業を計画・実施・検証した。

まず、「わかる」学習では、生徒の思考を促す学習課題を工夫し、学習内容の精選を行った。また、「つながる」学習では対話を重視した学習や「思考メソッド」、滋賀県地域資料集「12歳から学ぶ滋賀県の歴史」(サンライズ出版)を活用した。

さらに「つくる」学習では、歴史的事象の価値について判断する学習や「未来のヒント」になる歴史学習の視点」を活用するなどして学習を展開した。3つの学習活動を展開することで生徒の思考を促し、歴史の本質について理解させることで「社会を創る力」の育成をめざした。

公開授業

●題材名 「開国について考えよう」

大老・井伊直弼の決断に迫る」 門野智哉教諭 (彦根市立東中学校) 本時では次時より始める近代の学習の導入として、生徒一人ひとりが課題意識をもつことをめざして、デイベイト形式の討論を用いた。

特に、大老・井伊直弼が決断・実行した「開国」について多面的・多角的に考察できるように配慮することで生徒の多面的・多角的な思考が深まるように配慮した。また、「フリップ」(画用紙半分大のカード)を用いて主張の要点を構造的にまとめさせる学習を通して生徒の「わかる」の深化を図った。

研究発表 入子彰子主幹教諭 (東京都 文京区立音羽中学校) 高田孝雄主任教諭 (東京都 足立区立立竹の塚中学校) 「時代を大観し表現する活動」古代までの日本における「外国との関係」に着目して

「国際社会を生き抜くこれからの生徒を育てる社会科学習のあり方」を研究主題として、「国際社会で求

められる生徒」の育成に向けて研究を推進している。

特に、歴史専門委員会では「時代を大観し表現する活動」を重視している。発表では、東アジアとの深いかわりに気づかせながら古代について大観させるための話し合い活動を活用した指導事例が報告された。

●指導助言

玉井 正氏 (滋賀県教育委員会 学校教育課指導主事) デイベイト形式の授業などで、根拠を示して意見を表明する力を高めることや、系統的・段階的に他人の発表に対して質問できる力を高めることが大切である。

授業者が生徒の質問をうまく拾い上げ、学習目標に関わるような意味づけをしていくことが重要だとご指導いただいた。

講師講評 中尾敏朗氏 (文部科学省 初等中等教育局視学官) 「フィンランドメソッド」

とされることをご講演頂いた。 「公民的分野の学習内容」と「自分たちが生活している社会」がつながりをもち、実感として理解できる状態を指す。豊かに「わかる」ことが「社会を創る力」を育てると考えた。「わかる」ために「つながる」「つくる」学習活動の充実が不可欠であり、そのために試行錯誤を繰り返した。結果として、「つながる」「つくる」学習活動として、模擬議会や市の行政への提案をつくるといった学習活動は有効であったと考える。また、グループ討議を積極的に取り入れることで、生徒たちの思考が深まる場面も見られた。また、ICT機器を利用した双方向(指導者と生徒、生徒同士)のやりとりが議論を活発化させることを確認した。

森 康夫教諭 (守山市立守山南中学校) 公開授業では、「守山市中心市街地活性化事業」を取り上げ、第一次計画を評価し、これから始まる第二次計画にむけて生徒が提言をまとめる授業を行った。フィールドワーク、様々な資料の読み取りやゲストティーチャーからのレクチャーから、グループ毎に一次計画の評価と次期計画への提案を考えた。公開授業当日は、話し合い活動を通し、六つ示された提案を三つに絞り、さらに一つに絞りこみ、学級の提案とした。今回の生徒の提案について、市の担当課長にも授業にお越しいただき、評価していただいた。評価内容は、市としても十分参考にさせていただくというものであった。生徒たちの達成感も得られたと考える。

成果として、8割以上の生徒がB評価以上であり、内容の質も向上していること、また自然と「効率と公正」の視点から考える生徒が増えたことが報告された。課題としては、ワークシートに表現できない生徒(8%ほど)への支援の方法の具体化を挙げられていた。

重 秀雄教諭 (広島市立祇園東中学校) 「対立と合意」効率と公正」の概念を習得させ、活用し、探求させる実践・研究について発表。内容としては、概念を習得させるための教具として「効率と公正」のマトリックスの開発や活用した実践事例について具体的に発表された。また、

●講演講評

樋口雅夫氏 (文部科学省初等中等教育局教科調査官) 社会を創る力を育てるこれからの「社会科学」というテーマで、滋賀県の研究発表についても触れていただきながら、ご講演いただいた。